

書評（翻訳）

TOURIST BEHAVIOUR

— Themes and Conceptual Schemes —

Philip L. Pearce

Professor of James Cook University (Australia) Channel View Publications (U. K) 2005

第2回

梶本邦夫

はじめに

本誌7号(2007年3月)で、標記の書評・翻訳の一部を紹介した。前稿で全てを紹介し終え、合わせて私の考えも述べ、書評らしい体裁を整えればと考えていたが、翻訳を始めると、変えてはならないとされている「初心」が、いとも簡単に変わり、同僚の研究者の方々のお役に立てばという正義が頭をもたげ「書評・翻訳」というかってない形式のものになってしまった。いつも新刊本が海外で出版されると、その中でこれはと思われる文献を時間の合間にまじめに翻訳を始め、目途がつき次第著者や版元の承諾を経て出版できればと思うのだが、翻訳終了の目途がついた時には時すでに遅く、他の研究者により翻訳本が出版されるという憂き目に合ったことが数度ならず、その翻訳本を内心悔しい思いで購入し、読み、負け惜しみではないが見事でわかり易い翻訳だと感心し、自らを慰め、学生には「目標を定めたら一心不乱に突き進め」といいながら、時間を気にせず、目標も度々変わり、のんびりと仕事をするために寂寥の思いと後悔の念が今まで付きまどってきたが、研究生活も40年を越すとそれを感じなくなり、全て私の楽しみのためと納得して今回の仕事もまじめに終えたいと考えている。

前回は本書の2章までであったが、今回は3章以降紙幅の制限を考えながら紹介を続けたいと思う。第3章のテーマは「旅行経験者の類型化(The Travel Career Pattern Approach)」であるが、特に旅行者の旅行動機

(**Motivation**) に重きを置いて記述されており、その過程でピアースはマズローの欲求階層説に注目し「旅行経験者階層構造説」を提唱している。

また、第3章の中ごろから、ピアースとリー(Lee)による大規模な旅行動機と旅行経験者、旅行目的等に関する調査結果とその分析結果が記載されており、上記諸課題の解明に重要なデータが掲載されており、高く評価できるものと考え、可能な範囲でその内容を紹介し、調査の問題点や課題について論及していきたいと考えている。このような事情で、原稿枚数が増え、今回は第3章のみが対象となった。本稿がいつ終わるのかは私にもわからないが、とりあえずまじめに取り組みたいと思っている。

1. 旅行経験者の類型化

ピアース教授は、本章の目的を現存する旅行者動機研究の一部を修正することに集中することであると、続いて旅行者行動研究を進めるためには旅行経験者の**Motivation**研究が重要であるという基本的な立場を説明し¹⁾、最初に**Motivation**研究における先行研究の成果を紹介しながら「観光動機の研究は、レジャーやツーリズム研究およびツーリズム発展の基礎となるものである」と指摘する。特にCrompton('78)の論述を紹介し、「旅行者行動とその類型化は可能ではあるが、全ての旅行者行動の根底にある“なぜ”というキーファクターに対する質問に回答を求めることには多くの困難が存在する」とする彼の指摘にも注目している。

表 3.1 旅行経験者の旅行動機に関する確実で根拠のある理論についての主要素

要素		説明
1	理論の役割	旅行者に関するこれまでのニーズを整理・統合し、ニーズの再編成、さらに研究のための新たな志向を準備すること。
2	理論のアピール	専門研究者へのアピール、有用な観光産業の育成、そしてマーケットや消費者に対する信頼の獲得。
3	意思疎通の容易さ	潜在的な利用者への説明を容易でわかりやすいものとし、全体的な（1つの地方を特定するのではなく）ものにする。
4	旅行動機に関する測定能力	経験的研究を受け入れ、理論は評価目的に従い質疑応答形式に作り変えることが必要。
5	多様な動機と単一目的の双方への対応	旅行者たちが一回の旅行で求める満足のためのニーズについて考えなければならない。決してニードは1つではない。
6	ダイナミックなもの及び速写的なものへのアプローチ	個人的なもの、社会的なもの双方は次第に変化していくことを認識し、観光における考え方やモデルも変化していくことを考えなければならない。
7	非本質的なものと本質的な動機付けの役割	旅行者たちの本質的な動機、自己満足の目標、そしてその他のものとして社会的制裁が伴う非本質的な動機について考えなければならない。

ibid., p. 52

またピアースは、他の先行研究の中で、「数名の研究者達が全ての旅行者行動の根底には **Motivation** が存在する」との結論にも大きな感心を示し、**Motivation** 研究こそ旅行者行動解明の大きな鍵となることに確信を持つようになった²⁾。

Motivation 研究は企業や商業分野における様々な経営分析における評価と同様に、旅行先選好過程 (**destination-choice process**) において、旅行動機が大きな影響を与えているとし、多様な旅行者訪問形式 (**tourist visit pattern**) は、このような旅行先選考過程の結果であるとする³⁾。

表 3.1 は、ピアース教授の旅行者動機に関する理論構築のための7つの留意点とでもいえるものである。この表は我々には抽象的でわかりにくい、人々がなぜ旅行をしたいと考えるのか（旅行動機）を理論化するためには、いうまでもなく旅行経験者から得られる旅行動機データの分析が重要であるとし、そのためには今までの旅行者の持つニーズの再整理や統合が必要である（第1要素）であると説明する。また第2要素では、今までの理論を学際的な検討を促すために専門研究者へのアピールや観光産業の育成、またそれらを通じて観光市場や消費者の信頼を獲得する必要があると述べている。また、観光に対するわかりやすい説明、意思疎通方法を考え（第3要素）、旅行者のニーズを分析し（第5要素）、これらの研究を通じて本質的な旅行者動機を発見する必要がある（第7要素）と説明している。また、これらの研究を進めるためのわかりやすい調査方法と基準を確立し（第4要素）、その背景にある社会や旅行動

表 3.1.1 旅行（者）動機5段階説

階層	各階層の内容
5	自己実現欲求 (self-actualizations/fulfillment needs)
4	自尊心と成長欲求 (self-esteem and development needs)
3	関係性欲求 (relation-ship needs)
2	安全欲求 (safety/security needs)
1	休息欲求 (relaxation needs)

原文 pp. 52-53 の文章をまとめ筆者が作成（上記5の **actualizations** について原文は **actualisations** になっており、**s** が **z** の誤植かと考えたが本文献各所の他の単語にも **s** と **z** の表記違いがあり、ピアースの癖ではないかとも考えられる）

機についても常時変化していることも認識しておかなければならない（第6要素）と主張している。

次にピアースは、旅行経験者には5段階の階層構造が存在するという。この「旅行経験者階層構造説」(**The travel career ladder approach: TCL**) は、ピアースと **Caltabiano (1983)**、またピアースと **Moscardo (1886)** によって研究が進められていたが、その基盤的理論はいうまでもなく **Maslow** の「欲求階層説」(**needs hierarchy theory, 1970**) によることを明らかにしている⁴⁾。

表 3.1.1 「旅行動機5段階説」の表は筆者が独自に原著者の文章から作成したものであるが、まさしくマズローの欲求段階説をほとんどそのまま書き換えたものになっている。

Rowan (1998) によると、「ポピュラーな大学のテキストでもしばしばこのマズローの研究を単純化しすぎた

表 3.2 旅行経験者パターンに関する基本用語

基本用語	概念規定
Travel needs/motive (旅行欲求/動機)	観光行動を引き起こす力。これらには生物学的、社会文化的な力の 2 つがある。
Self/others-oriented motives (自他志向動機)	旅行動機には内部志向と外部影響の 2 つの要素がある。
Motivation pattern (動機付けのパターン)	旅行動機は単一動機よりむしろ複数動機による。
Travel career (旅行経験者)	休暇を取って個人的立場で旅行する旅行経験者を論じる動態的概念。経験的研究。年齢やライフ・サイクル等からのアプローチ。
Travel career ladder (TCL) (旅行動機階層説)	旅行経験者の欲求や動機は 5 階層で構成されるとする古典的階層モデル ⁸⁾ 。
Travel career pattern (TCP) (旅行経験者様式)	TCL モデルにおける概念についてより経験レベルを反映させて強調したもの。

ibid. 55. 本表は一部長文のため要点のみ翻訳した。

り、不正確で説明に誤りがある」という⁵⁾。

Rowan は続けて、「マズローの研究は、欲求が単純な 5 つの部分からなる三角形として描写される場合が多いが、最後の段階である成長欲求は、自尊心欲求と数種の自己実現欲求で構成される重層構造になっている」と述べ、マズローの研究は単純な階層説ではないことを強調している。

確かにマズローの欲求段階説を学生たちに説明する場合、三角形を書き、その中に 5 段階の各項目を記述し簡単に説明する場合が多い。特に 5 段階目の自己実現欲求がマズロー学説の真髄ではあるが、彼の文献からそれらをまとめ短時間で説明するには複雑であること、いまだ論理の不明確さが存在するため正確な説明が困難なためだと考えられる⁶⁾。

ピアースは、「マズロー理論こそ唯一の TCL 構築のための手がかりである」とし、また続けて「観光やレジャーにおける旅行経験者概念は TCL 接近にきわめて重要である」⁷⁾とも述べている。また、このような旅行経験者の旅行動機調査から得られるものは大きいとしながら、このような調査をレジャー研究に利用するには若干留意しなければならない事柄が存在することも合わせて指摘している。

表 3.2 は本書に多く出現する用語の意味の定義を明確にするために作成されたものだといえる。

2. 旅行動機調査

ピアースとリー (Pearce and Lee, 2005) は、前記の諸課題の結論を得るために大規模な調査を行っている。まず、旅行動機の調査方法 (Surveying Travel Motiva-

tion) やインタビューに関する一般的な留意事項などを記述し、調査と分析結果を 56 頁から 85 頁 (3 章の最後) に渡って多くの図表を屈指し分かりやすく説明している。調査方法や分析手法については特に目新しいものではなく、極めてオーソドックスな手法を用いている。

最初に、オーストラリア (57%)、イギリス (21%)、その他の西洋諸国 (21%) で行ったサンプル調査 (1012 人) の事例 (Sample profiles) について、調査対象者の特性 (標本特性) や地域別、年代別、性別等の回答率などの調査概要を紹介している。データ収集のために、北オーストラリアの調査では、大規模ショッピングセンター前や鉄道の駅、あるいは空港等で調査を実施している。このようにして収集された調査結果を PCA (成分分析; Principle component analysis) やクラスター分析 (Cluster analysis) 等にかかけ、分散の 67.9% が説明され、かつ負荷が 0.4 以下のものを除き、最後に検定 (t 検定) をおこないデータの整理を行った後、調査結果をまとめている。その目的と結果を次の 3 項目にまとめている。

- (1) 旅行動機の全体像の解明
- (2) 予備調査による旅行経験分析
- (3) 旅行動機と旅行経験の測定基準相互の関連性

3. 旅行動機分析

前期調査の分析結果 (表 3.3) は 59 頁から 61 頁までの 3 頁わたって記載されているが、紙幅の関係上必要事項に限り紹介したいと思う。

旅行動機に関する 69 の調査項目から 14 の主成分が

検出され、各々の項目をその特性から下記のように表現した。

- ①目新しさ ②逃避ないしはリラックス
 ③人間関係性（友人や家族などとの旅行を通じて）
 ④自主性 ⑤自然 ⑥自分の成長 ⑦刺激
 ⑧個人的成長 ⑨人間関係（安全）⑩自己実現
 ⑪孤独 ⑫ノスタルジー ⑬ロマンス ⑭認識

上記 14 の主成分に関しては特に不明の項目はないが、⑪の孤独を求めることが旅行の動機になったり、最後の⑭の「認識」項目では、知識や技術を分け合う、あるいは異国のの人々との相互認識など興味深い成分も含まれる。

次に、各ファクターごとに固有値の高い項目を上げると次のようになる。

まず、①の「目新しさ」の項目では、「楽しみを味わう」、「異なることを経験する」という 2 つの項目で得点が高く、②の「逃避ないしはリラックス」の項目では、「日常生活のルーチンワークからの開放」に大きなスコアが与えられている。

③の「人間関係」の項目では、「仲間同士の親交」、「家族との交わり」といった項目のスコアが高く、日頃の交流とは別に、旅行という別環境における交流が新たな関係、あるいはそれらの深化を促進している様子が伺える。

④の「自主性」の項目では「誰にも拘束されない自由さ」のスコアが高く、また⑤の「自然」というファクターでは、「自然との調和」というファクターに比べ、「自然を鑑賞する」「自然に溶け込む」といったファクターの得点が高くなっている。⑥の「自己成長」の項目では言うまでもなく「新しい事柄の学習」がトップで、続いて「異文化の体験」が大きな得点を得ている。

⑦の「刺激」の項目では、未知への探検、興奮の実感、予測できない経験、などのファクターが上位を占めている。⑧の「個人的成長」項目では、「個人的な興味を増長させる」

「自分の能力の知る」「達成感を味わう」などのファクターのウエイトが高い。同様に⑨の「人間関係」では、個人的な安全・安心、尊敬できる人の存在、同じ価値観や趣味を持った人々との出会い、などが上げられている。⑩の「自己実現」に関しては、自分の人生の中で新たな尊敬できる人を得る、心の中の調和と平和、自分自身の理解、などの順番で高い得点を得ている。

人間は時には日常生活の雑踏から逃避し、旅の中で孤独を求めるが、⑪はこのような旅の動機の 1 つのファクターである。「心の平和や平穏の実感」、「人間相互の関係から起こるストレスやプレッシャーからの逃避」「雑踏からの逃避」などが主要なファクターになっている。

⑫と⑬はノスタルジーとロマンスを旅の動機としてあげている。「今まですごしてきた過去のいい時代を考える」「過去の記憶を思い起こす」といったノスタルジーに関する項目や「ロマンチックな関係」「過去の異性との思い出」などを旅行動機の要素として捉えている。

最後の⑭番目のファクターでは、旅行先の人々との知識やスキルの交流、相互理解、などをあげ、「認識・理解」(recognition) としてまとめている。

4. 旅行経験者階層分析

ピアースは以上のデータ全体の主成分分析の後、いわゆるクロス分析を試みている⁹⁾。

クロス分析の諸項目に目新しいものはないが、次のようなものになっている。

- ①性別 ②教育レベル（高卒、大卒など 4 項目）③職業（専門職、経営者、労働者、自営業など 12 項目）④海外旅行経験〔未経験、経験者（1-4 回）、経験者〔5-10 回、経験者（10 回以上）〕⑤国内旅行経験者〔未経験（0-9 回）、経験者（10-25 回）、経験者（26-50 回）、経験者（50 回以上）〕⑥年齢別（26 歳までから 45 歳以上の 4 段階）⑦国籍（今回の調査対象は、オーストラリア、イギリス、他の西洋諸国の 3 分類）

5. 旅行動機と旅行経験者レベル

ピアースは、前記のクロス分析から諸項目間の関連の検証を試みた。まず、「動機」と「旅行経験の異なるレベル」（2 分類）との間の因果関係は t 分布に従うとし、旅行経験レベルの 2 種類を説明変数 (independent variable) とし、14 種類の動機ファクターを従属変数 (dependent variable) として検証した。

動機ファクターと 2 つの旅行経験ファクターの間には「逃避、リラックス」「直接的な人間関係」「自主性」「自然」「自分の成長」等々で有意差 (significant difference) が認められたが、「目新しさ」「刺激」等々では有意差が認められなかったとしている。

6. 旅行経験者様式 (TCP) 構造の進展

ピアースは旅行経験者の層を 2 層に分け、それらと旅行動機との関連を調査してきたが、特に日々の生活から離れ、異なる場所で気分を和らげること (escape/relax)、目新しい場所を求める (novelty)、新たな人間関係の構築 (relationship) そして自らの成長を図ることが全般的に最も重要なことであり、旅行者の核となってきたと述べ、また、旅行経験の豊富な人々のグループでは、旅行の主役になりきること、自然を求めることで自らの成長の動機付けにしており、また旅行経験の浅い人々は、旅行の刺激を通じて人間としての成長や自己実現、ノスタルジー、ロマンス (ロマンチックな人間関係、セックス目的) そして認識などを通じてストレスを回避していると説明している。

このような調査結果は、Shoemaker (1989) の中年旅行者の調査結果でもよく似た結論が出されているとし、Shoemaker の研究を紹介しながら、明確にピアースのように旅行経験者 2 分類して調査はしていないが、少なくとも年 2 回以上旅行している人たちを対象

にしており、ピアースの結論と比較しても問題はないとしている。

7. 旅行経験者態様 (TCP) の更なる分析

旅行動機研究の次の段階は、旅行経験者態様研究における理論概念の拡大ともう一步進めた確認がなされたことである。しかし今までの研究対象がオーストラリア、イギリス等の西洋諸国に限られてきたことから、次の研究対象としてアジア諸国の中で韓国が取り上げられ調査がなされることになり、異文化交流社会の中で極めて有用なものになった。

韓国での調査目的は次の 3 つの視点から行われた。

- (1) 旅行経験者様式研究の概念的理論と (旅行) 経験との関連の確認と一段上の発展
 - (2) 旅行経験者の測定基準に関する方法論の確立と旅行経験概念を一段と高いレベルで説明すること。
 - (3) 韓国人の旅行動機と旅行経験との間の諸関係の調査・研究を異文化交流の視点から旅行経験者様式研究の発展 (充実) と成果として研究すること
- 以上のような調査目的に基づいて、6 ページにのぼる

表 3.6 The Korean sample : 14 factors and their importance as travel motives

Factor*	Items**
1. 目新しさ (novelty)	楽しく遊ぶ
2. 逃避・リラックス (escape/relax)	日常生活から離れる
3. 自己認識 (self-actualization)	個人としての働きや精神的な価値
4. 自然 (nature)	景色を見る
5. 親族・親類 (kinship)	家族や友人との人間関係
6. 自己高揚 (Self-enhancement)	自分の技能や才能を示す
7. ロマンス (Romance)	ロマンチックな人間関係。セックス目的
8. 家族・親族との親密な関係 (Kinship-belonging)	家族・親族等との間の思いやり
9. 自主性 (Autonomy)	誰にも縛られたくない
10. 自己成長 (Self-development)	周りの人たちとの会話
11. 郷愁 (Nostalgia)	過去の記憶を想起こす
12. 奨励する (Stimulation)	恐れず冒険的な経験をする
13. 孤立する (Isolation)	雑踏から離れる
14. 社会的地位 (Social status)	華やかでトレンドイな場所を経験する

*原文と翻訳併記

**原文の中の複数項目から、正の相関係数の一番高いものを例示した。

[1] Kaiser-Meyer-Olkin 尺度におけるサンプルクラスターの妥当性: 0.95

[2] カイ二乗検定値: 40695.73

[3] 自由度: 2701/sig. = 0.00 変数の説明: 67.9%

調査票を作成した。この調査では、74の旅行動機を“非常に重要”と“重要ではない”の2項目を選択させる方式で、英文で作成されていたものを韓国語に翻訳し、Daegu、Daejon と Seoul の各地で実施された。

ピアースのこのような調査は、国際化が進行する中で、観光学特にその対照となる旅行者行動が、国籍や年代、旅行経験の度合いなどでどのような相違があるのか、特に旅行に求める動機研究が徹底されれば、観光立国を目指す我が国ばかりではなく、観光産業にも大きな手がかりを得るものと考えられる。

韓国での調査結果は70頁(表3.6)から73頁にわたり下記のように記載されているが、Itemsの中でピアースの示す14項目と相関の高いもののみを紹介しておきたい。

8. 旅行経験者のクラスター分析

ピアースは続いて同データを利用し、2番目の分析として自由度〔df〕を2に設定し7つの旅行経験変数と、旅行経験の度合い(3段階)によってどのように旅行経験に対する自己認識が説明できるかを知るためにカイ自乗値の算出を行った。そのあと、サンプル間の距離ないしは変数間の距離を知ることにより、近い関係にあるものをグループとして捉えるいわゆるクラスター分析を行っている。クラスター分析には周知のように変数クラスター分析とサンプルクラスター分析があるが、ピアースは前者のクラスター分析を行っている¹⁰⁾。

ピアースはクラスターの個数を3つに設定し、クラスター1は「旅行経験者」、2は「未経験者」、3は「国内旅行経験者」とし、6つの旅行経験変数との関連を計算した。

6つの旅行経験変数(Travel experience variable)を紹介すると、

- (1) 海外旅行レベル
- (2) 国内旅行レベル
- (3) 海外観光旅行の割合
- (4) 国内観光旅行の割合
- (5) 団体・バック旅行経験者レベル
- (6) 国際旅行経験の合計

これらの分析結果の中で、有効にグループ化できるものとして、クラスター1の旅行経験の豊富な人たちは海外旅行をすでに多く経験し、また国内旅行にも大きな関心を示しており、また旅行経験のないクラスター2の人達は、国内観光旅行への期待が高く、国内旅行のみ

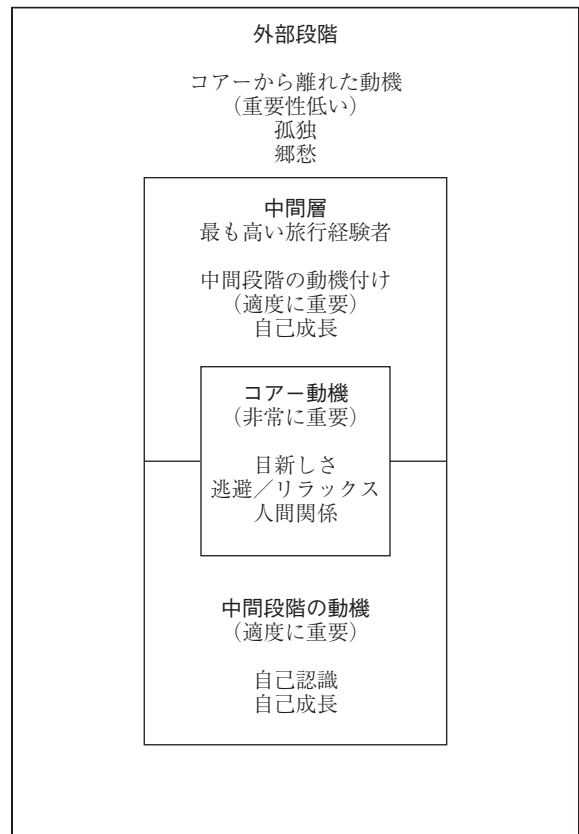


図 3.1 旅行経験者パターン概念 (TCP)

引用：79頁

の経験者であるクラスター3では、海外観光旅行への期待と大きな関連があることが判明した。さらにピアースは、旅行経験者のみをサンプルにクラスター分析を行っている¹¹⁾。

図 3.1 はいわゆる今回の調査のまとめとも言うべきもので、分かりやすく図示している。ピアースの研究は、旅行経験の有無やその度合いと旅行目的との関連を各種の調査や分析を通して解明しようとするものであるが、その過程で新たな概念規定を提示し、旅行者の行動とその動機を明確なものにしつつあるように見える。

9. 今回のまとめ

今回は第3章を捉えて翻訳をしながら、ピアースの観光行動研究に接近してきた。

序で述べたように、翻訳と書評を織り交ぜたような奇妙な記述に終始したが、これもまだこの書に触れておられない多忙な研究者の一助になればという老骨の思いと一笑下されば幸いである。さて、この章を理解するには、いわゆる多変量解析の知識が必要で、筆者は、以前在籍

した研究所で長年各種のデータの分析にあたってきたが、英文の統計解析用語の翻訳について、必ずしも十分だとは思っていない。同僚の研究者のご意見、ご示唆を仰ぎながら次回以降の仕事に万全を期したいと考えている。

注

- 1) Philip L. Pearce *The travel career Ladder*, 1988, 1991, 1993
- 2) Philip L. Pearce *TOURIST BEHAVIOUR –Themes and Conceptual Schemes–*, 2005.
——— Channel View Publications (U. K), p. 50
- 3) *ibid.*, p. 51
- 4) *ibid.*, p. 52
- 5) *ibid.*, p. 53
- 6) 詳細については拙稿「観光における消費と欲望の構造」『大阪明浄大学紀要』第6号 2005年参照。
- 7) *ibid.*, p. 53
- 8) *ibid.*, p. 55、表3.2のこの項の説明は長文であるため、筆者が要約。
- 9) *ibid.*, pp. 62–63
- 10) *ibid.*, p. 73、表3.7およびp. 74、表3.8参照。
- 11) *ibid.*, p. 74、表3.8で「旅行経験者変数」(Travel experience variables)の3番にある変数、「海外観光旅行の割合」(Proportion of international pleasure travel)と4番の同様の「国内観光旅行の割合」の意味は、どちらに重点が置かれているかで別表記になっているものと思われる。

